もいへり」。愼城若葉に「とろくの山家育ち」。

どろく　神佛の罰も思ばぬどろく者、友達甲斐に引しめて意見頼みまする（女殺）　此方の其正直を見拔いて、どろく者めがしたい甲斐に踏付ける（女殺）

「どら」とも「どろ」ともいふ。「どろ」の條を見よ。（一說に「隨落」の訛といひ、或は「道樂」の訛といふ。）放蕩。放埒。松屋筆記卷五に、「どろば・どろもの・どうらく＝ドラモノは蕩物也、放蕩にてとりしまらぬ由の名也、ドウラクもトロクルの訛語也、トロバウも蕩坊也、坊はもと法印をいふより轉りて、ただの人にも某坊などいへり」。物類稱呼卷五、言語の部に「思ふにだらく變じてだうらくといひ、又だうらくといふ詞ちぢみてどらとなりたるか」。

***どろぼう**　机おつ取り、泥坊めとてはったと打ち、道知らず義も知らぬづくにふめとては丁ど打つ（女夫池）

「どろ」（その條を見よ）に、賊坊などいふ「坊」の添加した熟語である。放蹤者。ならずもの。浮浪者。俚言集覽に「泥ぼう。江戸にては盜を云、大阪邊にては浮浪子弟を云」。

***とわたる**　いかさま是は七夕の年に一度をこらへかれ、又取越の天の川とわたる舟か（用明天皇）

「門渡」の「門」は地形の狹くなつて水瀨一つに流れる處を云ふ。門を渡る。古今集・雜上部の歌に「わが上に露ぞおくなる天の川、とわたる舟の櫂のしづくか」。

とぬきん　梅ありその花七つ八つ九つとぬきん絃十（三國志）

［斗爲巾］筆十三絃の中にて、第十一絃を斗、第十二絃を爲、第十三絃を巾といふ。箋注和名類聚抄・卷六、筆の條に、「今案筆譜云、一二三四五六七八九十斗爲巾、是十三絃名也」。

とをだんご　宇津の山邊のとをだんご、所所の名物買うておあしつくつく（丹波與作）

［十團子］駿河國安倍郡宇津山の名物である。宗長手記に、「宇津の山に雨宿り、此茶屋苔よりの名物十だんごと云、一杓子に十づつ必らず女郎などにすくはせ興じ」と見え、東海道名所記（貞享五年刊）宇津山を記せる條に、「坂のあがり口に茅屋四五十家あり、家ごとに十團子を賣ろ、其大さ赤小豆ばかりにして麻の緒につなき、古は十粒を一連にしける故に十團子といふならし、……樂阿彌十團子を見てよめる、小粒なるうつの山べの十團子、しかもかたくて齒にあはぬなり」。風俗文選大註解（佐保介我撰）卷三に十團子を旅人が食つてゐる緒が載せてある、それによれば普通の大さの團子である。「うつの山」をも見よ。

十といひつつ十返　神武十二代の帝景行天皇、十といひつつ十返の春秋を重ねましませば（日本武尊）

十返は千年をいふ（「とかへり」を見よ）。十返の十倍卽ち萬年をいふ。伊勢物語の歌に「十といひつつ四つは經にけり」、とあるも四十年を經た意である。

とんげう　是心是佛の旨を存ず、これをば頓教と名付く（大原問答）

［頓教］頓速に成佛するを說く教法をいふ。華嚴・天台・眞言などの教法は、一生中に成佛するを說くによつて頓教である。

***とんしようぼだい**　常陸小萩と云ふ女、上下五日の車の檀那、志は思ふ人頓證菩提と書き記し（小栗判官）

頓證菩提南無阿彌陀佛（歌年佛）

［頓證菩提］頓に迷妄を去り佛道を成就して、佛果を證得すること。謠曲・求塚に、「南無幽靈成等正覺、出離生死頓證菩提」。

***とんせい**　昨日とやらん夕暮に遁世の身となりける由（吉野忠信）

［遁世］隱遁して世上の俗事に心を惱さぬこと。出家。

どんちやう　床の緞帳御簾もさつと下りければ（女護島）

［緞帳］だんだら筋のある幕。

とんてき　いやさ朝敵にもせよ、とんてきにもせよ、武士の一言綸言より重し（蟬丸）

とんちき。まぬけ。のろま。この文は朝敵とんてきと、同脚韻の語を用ゐたのである。

どんびやくしやう　身どもば和泉のどん百姓、土ほぜりでおぢやれども（歌念佛）

「どびやくしやう」（土百姓）に撥音「ん」の增加した語。土民の義。土著の農夫。百姓とは庶民の義、轉じて農夫をいふ。

どんぼ　どんぼも續く鮑も續く（浦島）

［杜父魚］鰕をいふ。硬鰭類に屬する魚、淡水に產し、沙魚に似て體長三寸ばかり、岩石の下に隱匿してゐる。物類稱呼・卷之二、動物の條に「杜父魚＝かじか、京大阪にてイシモチ、……、九州にてドンボ、筑前にてネンマル」。

な

な　隨分ぬからしやんすなと、名を引き包むこの屏風、火を吹き消して烏羽玉の、玉は奧にぞ入りにける（大經師）

［名］惡名。ここの文は、おさんが後に取る姦通の惡名を引き包むこの屏風の意。

***ない**　馬取ども其間宮へ往て休息せい、ないといふより中間ども休む方には足早く（鎌權三）　こりや岡平、用がある爰へ來いと、にこやかに言ひければ、ないと應へてござり寄る（碁盤太平記）　ないと應へて振出す（薩摩歌）

中間・小者・奴などの返答詞で、「はい」といふに同じ。（和訓栞に、「應對の辭に肥前陸奧にナイと云」とあるから、この地方では普通に用ひたものである。）

***ないぎ**　こなさんお内儀にならしやんすか（薩摩歌）　親御の國からお内儀呼び（國性爺）

［内儀］町人の主婦を呼ぶ稱。女重寶記（元祿十五年刊）卷之一に、「大名のを奧樣といふ、……町人のを内儀といふ、内の義則ををさむるといふ義なり」。

***ないがま**　熊手ないがま打入れ打入れさがせしば（源義經）　大長刀大ないがまに九尺の棒（用明天皇）

「なぎがま」（薙鎌）の音便。

ないけうばう　内教坊の後より嘶き出づる惡馬の相形（鵺八州）

［内教坊］宮城内・左近衛府と茶園との間にあつて、朝廷にて女樂・舞・舞妓を育成する所。江次第抄（七月節會）云、「内教坊、唐世置レ之、教女樂二之坊也、又云、樂舞云々、天子

令二内教舞一姫、見レ於二臣下一云々」。百錬抄・巻七云、「保元三年五月二十九日、覧二内教坊舞姫一、近代斷絶興二行之一」。

＊ないし　内侍・命婦のおもと　人（枕狩）

〔内侍〕後宮内侍司の女官に尚侍・典侍・掌侍とあつた。單に内侍とばかり書けるは掌侍のことである。

＊ないしどころ　天皇は神璽・寶劔・内侍所を帶し行方知れず（井筒）　禁中様御内侍所の釘下地（氷朔日）

〔内侍所〕温明殿をいふ。神鏡を鎮き祭れる所で、内侍これを守護するによつて内侍所といふ。よつて又直に神鏡をさしてもいふ。

＊ないじやくり　せめて在所が聞きたいと、聲を立てればないじやくり、氣も沈入る時しもあれ（反魂香）

「なきじやくり」（泣噦）の音便。しやくり泣き。

＊ないしよう　傳さへあらば内證から申上げんと存ずれども（淀鯉）　頭つきは兩替町、内證は曾我殿（女腹切）　以前は金銀ない大盡、今日參るは内證に様子も金もある大盡（壽門松）　上には姫様御誕生、御内證のよしみにてかかが乳を上げまし（丹波與作）　内證理性の光を放ち、虚空に上ると見えけるが（嵯峨天皇）

〔内證〕内密。内輪。表向きならぬこと。

「内證から申上げん」とは、勝手向きから申上げようの意。

「内證は曾我殿」とは、内輪は曾我兄弟のやうに貧乏であるの意。女大名丹前能（元祿十五年刊）三之巻に、「其くせ男は曾我殿、一日買うて其わけきくこともならぬ身代」。風流御前二代曾我（寶永六年刊）初巻に、「貧なことには曾我殿のやうなと、世話にいはるること近頃無念なれども」と見えてゐる。曾我殿といへば貧乏のことにいはれたものである。

「御内證のよしみに」の「御内證」は、人の妻を稱する語。菅原傳授手習鑑・寺小屋の段に、「ムウして其許は何人の御内證」。

「内證理性」の内證は、内心に證る眞理をいふ。

＊ないそん　急難、急病、内損、外損、胝（振袖始）

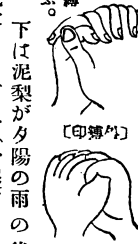
〔内損〕常に酒肴を嚙みて多く飲食し、其毒氣積つて腹中から腐るを俗に内損といひ、また内瘡ともいふ。胃腸などの病。

＊ないてん　日夜内典外典に眼をさらし（室町千載歌）

〔内典〕佛教書をいふ。日知録に「佛教之傳寖盛、後之學者遂謂二其書一爲二内典一」。

ないばくげばくのいん　内縛外縛の印を結んでかけ給へば（嵯峨天皇）

〔内縛外縛印〕十指を外方に組む印契を外縛印といひ、内方に組む印契を内縛印といふ。



＊ないり　下は泥梨が夕陽の雨の後虹を成せるに異らず（以呂波）

〔泥梨〕梵語（Niraya）である、地獄を云ふ。謠曲・石橋に「下は泥梨もしら波の、……、たとへば夕陽の雨の後に、虹をなせる奚、又弓を引けう形なり」。

＊なかがさ　燗せいでも大事ない、有も盃も入らぬ、中がさ添へて持つて來い（女殺）

〔中蓋〕中位の盒子。中形の椀。

＊なかご　今日直になかごに淨めの鎚目を入れ、銘を刻んで差上げよとの仰せ（唐船噺）　棒鞘の柄引抜きなかごを見れば（女腹）

〔中心〕刀身の柄の中に入つた部分の稱。刀劔略記に、「中心また込とも云ふ、櫛の中へこむる所なれば、中込の下略にてなかごと云ふ、込といふは中込の中を略したるなり」。

＊なかごと　陰言・中言・ささへ口、立つてはふすべ居ては讖り（卯月紅葉）　盜みとては致さず、人を殺せし咎もなく、ましてなかごと僞りせず（孕常盤）

〔中言〕兩者の間に入つて一方を惡しざまにいひなすこと。なかぐち。この語古くは萬葉集巻四の歌に「人のなかごときこすなゆめ」と見えてゐる。

長崎の伊左衛門様　長崎の伊左衛門様とは違うたもの、もう踊らぬぞや（博多）

大阪新町扇屋の太夫夕霧の馴染客伊左衛門（巣林子作・夕霧阿波鳴渡を見よ）のやうな長崎の糸客をかくいうたのであらう、そして其人は毛剃九右衛門のことであらう。九右衛門の詞に「亭主うすう見知りがあらう、廓の縦横十文字、昨日まで蹴ぜせりした我我」といひ、また太夫小女郎は九右衛門を障子の透より見て、「ありやわしが近付き、まさかの時は心便になりましよと、力を付けてくれた人云云」と言うてゐる。されば九右衛門は太夫などにも知られ、傾城買の糸客で、これを秀が長崎の伊左衛門様と洒落て言うたものと解することは、巣林子の文としてさるべきことと思ふは非か。

＊なかざし　源氏の大將義經に見參のしるしに小兵ながら中差を參らせん（門出八島）

〔中差〕貞丈雜記に、「中ざしといふはとがり矢をかりまたの次に差すなり、上矢のかぶらの次に差す故中差とはいふなり、とがり矢は羽四つ立にて鷹の羽なり、小羽は山鳥の尾なり、こしらへ樣一手の物なり、内むき外むきあり、……」。

＊ながし　ながしの松は深緣、じつと控の若緣（聖德太子）　笑顔ばかりの梅櫻、ながし控の睨合（孕常盤）　まづ鉢植の作り松・すんと流しの一枝は太夫の威勢備はりて（生玉）

〔流〕立花の法式にいふ流枝のこと。「しやうじん」の條の畫を見よ。立花時勢粧・八に、「立花祕傳抄之五。流枝は松に限りたるものなり、煙がへしとも香爐のぞきとも名づく、瓶の口二寸ほど上、後角より一文字に出して葉先を香爐の眞中にてとむる也、心すぐに副なびき、滿きほひたるにより流枝を一文字に指、是上の枝を取合宜しきが爲なり、一瓶の内流枝より低く出す物なく、又水際にて是より長きもの不レ可レ有」。

なかたん　そがいにせでも大事なかたん（博多）

長崎國說「なかつたに」の意。現今も佐賀・長崎地方で用ゐてゐる。

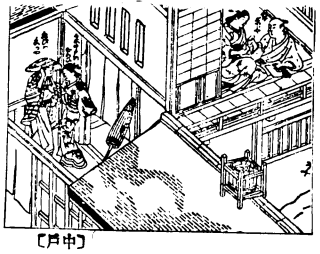
なかて　四つ目殺しに中手を入れて（國性爺）

〔中手〕圍碁で、敵の目を缺く爲に目の中に石を打込むこと。

＊なかど　夢の中戸の假枕（三世相）　夢の中戸の夢枕、月を憎みし夜半もあり（夕霧）　夜半の中戸も引替へて、人目の關にせかれ行く

（冥途飛脚） 青梅すきやらば惡阻でござろ、めいよな不思議や、中戸のかれ言がはや七月とぞ答へける（百日曾我）

〔中戸〕商家などの店庭から中庭に入る戸口。遊女などが情交の深い男と密會する場所は多く中庭の戸のあたりであつた。故に密會のことをいふに中戸が多く用ゐられてゐる。傾城禁短氣に、遊客と遊女が中戸に密會せる繪を載せて「太夫中戸の出あひ。しゆびはよいかや」と記してある。

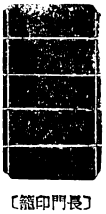


〔中戸〕

（傾城禁短氣六の卷所載）

ながといんろう 脇詰めたらしつくりの長門印籠（鍵樫三）

〔長門印籠〕牛馬の革に黑漆を塗つた印籠で、もと秋月長門守の創案であるといふ。江戸慣語に「秋月長門守屋敷より出る、牛皮にて造る印籠なり」。



〔長門印籠〕

なかとみはらひ 中臣祓のお聲の色どうもたまらぬ（閑八州）

〔中臣祓〕大祓に同じ。古へ朝廷で中臣氏がこれを掌つたから、大祓を中臣祓ともいふ。神祇令に「凡六月十二月晦日大祓、……百官男女聚二集祓所一、中臣宣二祓詞一、卜部爲二解除一」。

***なかなか** こなたの若衆平兵衛殿一寸呼出して下されませ、ハアアア中中や（氷朔日） してそれは必定にて候かと言へば、冠者小聲になつて中中のこと（雪女）

〔中中〕然り、承知したの意にいふこと。謠曲・狂言の文に用例が多い。鼎草に「俗言の中中は領承したる詞なり」。

中の風 其處へ縞縮に鹿子の帶、慥に中の風と見た（女殺）

大阪新町遊廓の妓女風。新町遊廓は曾根崎新地遊廓と南堀江遊廓との中間にあれば中といふ。新町遊廓は江戸の吉原のやうなもので、其の他の遊廓は岡場所的のものである。李秀撰、澤標（寶暦七年刊）新町開基の條に「新に町となりしより世人新町とよぶ總名なり、又當津にては中といふ」と見えてゐる。

なかのねのこ 「ゐのこ」を見よ。

***なかは** 忘れがたなや刀屋の、なかばと深き妻戀に（女腹切）

〔半〕遊廓では遊客の名を呼ぶに、其姓名に緣ある語に替名して呼んだ。「なかば」は卽ち半七の替名である。其他紙屋治兵衛を紙治樣といひ、河内屋與兵衛を河與樣といひ、鍛冶屋の弟子平兵衛を「ひら」といひ、鍛冶屋の弟子平兵衛を「ひら」といへる總てこの類である。この遣風は現今も遊廓内に存してゐる。

なかばらひ （天網島）

〔中拂〕盗と藏末との中間、十月末の支拂。

なかばん おんどもが二十七の年薩摩者と喧嘩した話、嘘ぢやなかばん聞かつしやれ（博多）

「ばん」を見よ。

***なからじに** 無慙や二人はなから死（二枚繪） なから死して（重井筒）

〔半死〕死にきらぬこと。半死半生。

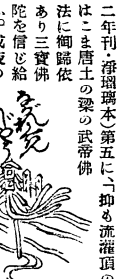
***ながれ** それはながれの身のつらさ（タ霧） ながれの里（扇八景） 此なみと申す娘流れの道に身を沈む（百日曾我） 嫁に勤めをさするは、息子の太四郎は女房に流れを立てさすと惡名を立てられう（酒呑童子）

〔流〕遊女を「流れの身」「流れの君」「流れの人」「流れの者」などと云ふ。往時遊女は多く水邊の地に住し、舟に乘つて客に接したからこの稱があると云ひ、また一說には遊女は身を賣られて諸方に流轉するとの名であるとも云ふ。按ずるに遊女が水邊に住んで、舟に乘り客に接したことは白記などにも見えて甚だ古ければ、前說の義より遊女をいふやうになつたのであらう。

〔流れの里〕は遊里のこと。「流れの道」は遊女の道卽ち遊女界。

***ながれくわんぢやう** 更に分ちも七流れ、流れ灌頂血の上の、亡者浮ぶる法の水（薩摩歌）

〔流灌頂〕流水中に率塔婆七本づつを七所、卽ち總て四十九本を周らし、樒や幡をもつてこれを飾り、率塔婆の各本に諸經の要文・光明眞言・陀羅尼・彌陀の名號などを書き、亡靈魚類等に佛緣を結ばしめる供養である。眞俗佛事編・卷之五に、「流灌頂。此法經軌に出づるに非ず、吾朝古德經軌の旨に依て設けたる也、灌頂と號くることは本幡を灌頂と名くるに就て、今幡の功德を彰して流灌頂といふ、謂は凡そ此法率都婆を流水の上に建て、造幡懸之、水此幡に觸れて流れて大海に至り、水中群生永劫沐二斯福一、只魚鱗のみならんや、此流を飲み或は此水に浴する輩皆同じく功德を被り輪王の果報を得、遂に法王太子となつて灌頂を受け果德圓滿するに至る、今因中說レ果流灌頂と云へ。今緣かしは木（元祿二年刊・淨瑠璃本）第五に、「抑も流灌頂の濫觴はこま唐土の梁の武帝佛法に御歸依あり三寶佛陀を信じ給ふ。或夜の夢中に老翁來つて實はく、されば六道四生の衆生無量の苦しみ止むことなし、此苦を遁るる功德をば名付け＊天王帝釋婆羅門禪二十八天日月星辰、下は人倫河海の龍神阿修羅冥官地獄餓鬼幽魂船魂鬼神まで殘らず供養を受くるなり、汝これを施せと夢を世世に傳へ來て六趣の闇を照すなり、まづ中陰を表し四十九本の卒塔婆の數、限り知られぬ捧げ物、燈明風に瞬けば花やちりちりち樒、香の煙は四方に滿ち、五如來の幡を立て、上人禮拜事終り、心耳を澄ます聲の昔、鼓を鳴し鈸をつき、施餓鬼の儀式ぞ殊勝なる」と見えてゐる。よつて以て當時の儀法が知られる。



＊て水流會と號す、最も勝れし功德、上は無量の佛菩薩卽覺聲聞明王八部梵

なきさはめのみこと 千早振る神代に啼澤女尊、長鳴の鷄をして天の岩戸の開けしより（本領曾我）

〔啼澤女尊〕伊弉册尊崩御ましましの際生れ給へる御子である。日本書紀・神代の卷に、伊弉册尊崩御ましまし、伊弉諾尊悲傷に沈ませ給へる條に「其淚墮而爲二神、是卽畝丘樹下所居之神、號二啼澤女命一矣」と見えてゐる。ここの文は、神代の尊の名の啼澤女をいうて、同語の長鳴にいひつづけたまでである。

長刀の草履 昔はやりが迎に出る、今はやうやう長刀の、草履を脫

いで編笠の、中の座敷に通りしが（夕霧）
草履を蹈延はしてその形長刀のやうに反れるをいふ。ここの文は、遣手を鎗にきかせ、長刀の草履と武器の縁語を用ゐた文飾である。

長刀鉾（ながなたぼこ）（堀川波鼓）
祇園會に長刀鉾の山車を引けばいうたのである。黒川道祐編・日次紀事に、長刀鉾の長刀は三條宗近が作なる由見えてゐる。「ぎをんゑのやまぼこ」を見よ。

梛の葉（なぎ）
「笠にさいたは梛の葉」を見よ。

なげざや
「熊の皮の投鞘」を見よ。

***なげし** 妻戸を上り長押を傳ひ（松風）
「ながおし」（長押）の約。鴨柄の上又は敷居の下に横に長く亘せる材。

なげづきん 遺物と歎く投頭巾・鼻紙袋・煙草入（五人兄弟） 落人の身に業平は墨の衣に投頭巾（井筒）
〔投頭巾〕四角に縫うて後方へ折つて被る頭巾。嬉遊笑覽・卷二に、「なげ頭巾。四角に縫たるを後の方へ折てきる頭巾なり（傀儡師人形また今小兒にも着るあり）、又いと長きもあり、難波にて俠客などの着たるも、其始東海道名所盡けんくわ買の奴といふに、投頭巾をやりおとがひ迄引かぶり云云」。

〔巾頭投〕

***なげぶし** 本歌・なげぶし・はやり歌（女夫池） 逢ひた見たさの唱歌なば、投節に唄うつ書いて見つ（吉野忠信）
〔投節〕貞享元祿頃京阪地方で最も流行した小唄節である。往昔投節の稱は歌句の終りをヤンと投げて謠ふからいひ、その後變遷を經て、明暦頃京都島原の遊女が謠ひ始めた一種の節で輕く切り、聲を投棄てるやうに謠ひ、唄は大方三四・四三・三四・五の形をなし、三絃に合せるものを投節と稱するやうになつた。「逢ひた見たさの唱歌」とあるはその條を見よ。

なごやのむなだかおび 眉は隱せどとりなりの、町でなごやの胸高帶（女殺）
〔名古屋の胸高帶〕名古屋帶といふは、寛永頃以前は丸打の組帶で兩端に總があつたが、貞享・享保頃は綿眞田の平帶が流行した。もと肥前名護屋で唐絲で組んだ帶なるによつてこの稱がある。當時は女も帶を胸まで高くあげて纏ふのを意氣な風として流行した。寛濶平家物語（寶永七年刊）卷四に、「近年は抱帶無しに胸に卷立て、又此頃は三重まはりに幅狹く臍どほりに締付け、はらりと結下げたり、されば女帶古は五尺三寸に極りしが、今は壹丈八尺五寸なくては思ふままならず」。色縮緬百人後家（享保三年刊）三之卷に、「無紋の黒縮緬・淺黄の下着、わたりもふかの中ぐけ帶胸高に結び、加賀笠に紫縮緬のばらし、長長し夜を飯蹠せんとは誰か思はん」。萬金產業袋・四・衣服門に、「名古屋織（男女）帶。糸眞田の事なり、女帶は總付幅四寸位、八つかけ・かすり・縞・無地品品、男帶幅二寸五分位、尤糸眞田といふは只一枚に織りたる物、名古屋織といふは袋打なり、此袋打にも二品、横糸の眞ともに絹のより糸にて織りたるあり上品なり、又眞に木綿糸を入れたるありこれ中品、右何れも夏帶地なり」。骨董集・上編中卷に、「名古屋帶。文祿前後より寛永の頃までの古書を見るに、男女ともに絲を紬にし、繩に似たる兩端に總を付けたるを、幾重ともなく廻して帶にしたる體あまた見えたり、其色は白あり紅あり、青黃赤などを交へて彩色したるものもあり、按ずるに是は名古屋帶なるべし、昔肥前の名古屋にて唐糸をもて組みたる故に名古屋帶とも又組帶とも云ひしと或人云へり……。拠紬の名古屋帶は便利ならざる故に寛永以後はやや廢れたるにや、貞享より享保の頃の草紙どもに往往見えたる組帶、名古屋織の帶、糸打の平帶、名古屋打の房帶などいへるものは、寛永以前の古制の如き丸打にはあらで、平打にて今いふ糸さなだの類なり」。女殺油地獄のここの文は「町（町風）で無い」（即ち傾城風）の「な」を「名古屋」にかけていひつづけたのである。「小笹に露のたまられぬ」をも見よ。

なさか 澤潟が家の寶、狐の革の鼓をも上げよとの宣旨なるが、これにほうど困つたり、どうぞなさかの立たぬやうに奪ひ取りやうあるべき（天鼓）
「なさが」の濁點を脫したのであらう。名疵（なきず）の意。名に疵つくこと。汚名。「さが」を見よ。

なさぬなか 松若殿とても父上の御胤、私も同じこと、なさぬ中にはなほ恥あり（隅田川）
〔不成中〕まま親子の間柄をいふ。「なす」は成で生む義。竹取物語に、「已が成さぬ子なれば」。大祓詞に、「國中に成出武天之益人等」。

***なしうち** 平禮小結梨打や（用明天皇）
梨打烏帽子（世繼曾我）
〔梨打〕「なやーうち」の略。柔かに作つた烏帽子で揉烏帽子の一種である。表ふしがね染の綾で、裏はうすやうな黑漆に塗り縫うて作る。

***なしつぼ** 梨壺梅壺夜の御殿（天神記）
〔梨壺〕溫明殿の北、麗景殿の東にある昭陽舍の別稱である、庭中に梨樹を植ゑてあつたのでこの稱がある。

なじほ 漆漉の紙は見とほし、春彥の尊と一締になつて妹を奪うて、鳥の子とはなじほらしいたくみちやな（持統天皇）
〔名鹽〕攝津國有馬郡鹽瀨村大字名鹽より產出する紙を名鹽紙といひ、横一尺四寸縱五寸一分位のもので、多く書信用となす、世に大阪半切といふものこれである。ここの文は「名鹽」に「なあしほらしい」をいひかけたのである。

なしものをけ（用明天皇）
〔鰊桶〕「なしほものをけ」（魚鹽物桶）の略。しほから桶。和訓栞に、「なしもの。醢をいふ、鰊桶も同じ、魚鹽物の義也といへり、新撰字鏡に鰊桶を魚のわたとよめり、今わたじほからといへり」。

なだ 心中が嬉しくてうらなだがこぼるると泣いて見せければ（加增曾我）
「なんだ」（涙）の擬音の脫落した語。

なつかぐら 京は浪華の景色より、劣るみな月なつ神樂（女殺）
〔夏神樂〕難波鑑（延寶七年刊）に、「六月十七日・御靈夏神樂、同二十一日・博勞町いなり夏神樂」。

***なつげ** 御帳面の第一の、筆も夏毛の墨は（會稽山） ならびなつ毛の狩野の筆（反魂香）
〔夏毛〕鹿の毛の夏になつて、黃色に白斑の鮮かに出たるをいひ、その毛で作つた筆を夏毛の筆といふ。和漢三才圖會卷十五、蘂筒筆の條に、「今多所用者鹿毛也、有白赤二種……、夏月徐長俗云穿色微赤而强」。

***なつしよ** 納所同宿入替り立替

り（萬年草）

〔納所〕寺院にて事務を取扱ふ所を云ふ。寺務を執る坊主を納所坊主といひ、略して納所ともいふ。

なつびき　蚊帳に隱るる夏引の、絲に繫ぎし玉の緒の（女夫池）

〔夏引〕春蠶の夏に上つたのを絲に繰り引くこと。

***なでしこ**　種蒔き捨てしなでし子の、花の盛りを餘所に見て（夕霧）

〔撫子〕瞿麥に愛撫する子（ここでは源之介）をいひかけたのである。瞿麥に愛撫子をいひかけたのは古歌にもその例が多い。

***なでん**　南殿の御格子（浦島）

〔南殿〕紫宸殿のこと。この殿南面なるよりいふ。

ななくさはやす　なな草囃す間もないが目に見えぬか夕霧）

〔七草囃〕正月六日の夕七種菜を俎上に載せて叩き刻みながら、「唐土の鳥が日本の土地へ渡らぬさきに七草たたいてとんとんと」と囃す。（この唄國によつて何れも大同小異である。）以て翌日の七種菜粥の料とする。平安城（古淨瑠璃）第三に、「五形・はこべら・佛の座・すずな・すずしろ・せり・なづな、賤が門田の初若菜、人は摘まいで白雪が積む、七草なづな掻寄せてほとほとと囃さん、唐土の鳥と日本の鳥とはがひ重ねの御代は萬歲千歲樂と、囃し納めて御粥に調じつ俳諧歲時記菜草に、「七草囃打＝七草は芹・薺・鼠麹・蘩蔞・佛座・菘・蘿蔔なり。……按に事文類聚に歲時記を引て、曰く、正月七日多く鬼車鳥渡る。家家門を槌戸を打、灯燭を滅してこれを驅ふと。和俗七種を打つに、唐土の鳥が日本の土地へ渡らぬさきにと唱ふるは此鬼車を忌む意なり。板を打つは鬼車鳥の止まらざるやうに禳ふなり」。「どこやらの男と云云」をも見よ。

***ななつ**　あれ數ふれば曉の、七つの時が六つ鳴りて（曾根崎）　伊左衞門樣か、なんと喜三、これは夢か七つか、扨お久しや懷かしや（夕霧）

七つ時をいひ、午前または午後の四時頃。「とき」を見よ。「夢か七つか」の「七つ」は、曉の目覺め頃なれば、現の意にいうた稱言葉である。

***七つ道具**　七つ道具の臺笠立傘・馬標（堀川波鼓）　私が生國陸奥の國、七つ道具の一通り（薩摩歌）

蓑笠、立傘、鎧、長刀の類であつて、大名行列の表道具である。「陸奥の國七つ道具」は、陸奥を六つにきかせて七つ道具とつづけた文飾である。辨慶が衣川で七つ道具を負うて立往生した話は世に名高い、その七つ道具は、鋸、槌、鎌、鉞、熊手、鐵棒、長刀であつたといふ。

七つの芝居　千日寺の鐘も八つか七つの芝居、二人が噂世話狂言の（重井筒）

竹田近江の操座、片岡仁左衞門の歌舞伎座、山本飛驒掾の手妻人形座、篠塚次郎左衞門の歌舞伎座、岩井半四郎の歌舞伎座、嵐三右衞門の歌舞伎座、及び竹本の操座をいふ。重井筒の血汐の膕染のこの所の文中に、「竹田か」「片岡に」「袂の飛彈掾」「篠塚に」「岩井の半四郎」「西に嵐の」「くれ竹の節を習ひし淨瑠璃」とあるは、この七座をきかせたものである。そしてここの文に、「二人が噂世話狂言の仕組の種となるならば」といへるは、この七座に座本及び染川十郎兵衞（片岡座）、芳澤嵩蒲（岩井座）が揃つて興行してゐた時を當込んだもので、その頃は寶永四年冬から寶永五年に亘り、また重井筒の文中に火燵の段などがあつて、冬のことになつてゐるから、重井筒の作は寶永四年の冬であつたことが知れる。「ここは竹田か云云」をも見よ。

七つの文　軍書は孫子・吳子・三略・六韜の七つの文の道（國性爺後日）

武經七書即ち、孫子、吳子、三略、六韜、司馬法、尉繚子、太宗問對をいふ。

ななつや　春知り顏に七つ屋の、藏の戸出づる鶯茶の（壽門松）

質屋をいふ。質を七に通はせて七つ屋というたのである。好色三代男（貞享三年刊）卷之四、二三度蒔きし好色の種の條に、「道具は須磨の浦さびしく、小袖を帶と皆七つ屋へやりて」。

ななところ　「波に山王祭七所」を見よ。

七の賢き人　古の七の賢き人も皆、竹をかざすは變りなき御代を樂しむ心あり（開八州）

竹林の七賢をいふ。晉の世に竹林の中に遊び、酒を飲んで樂しみ、清談に耽つた七人の徒。世說、任誕篇に、「陳留阮籍、譙國嵇康、河內山濤、沛國劉伶、陳留阮咸、河內向秀、琅邪王戎、七人常集二於竹林之下一、肆意酣暢、故世謂二竹林七賢一」。ここの文は竹林の七賢のことをいうたのであるが、また竹の紋つく竹本座の變りなき御代を樂しむをきかせて、これを祝福した。開八州繫馬は巢林子が淨瑠璃の最後の作で、彼が死の近づいたこの作に、己が藝術の上演される竹本座の安らけく長久なれと祝ふ彼は、常にこの愛著を以て蠻腕を揮つてゐたことが、想見されて無量のゆかしさを感じる。

***なにがし**　何某は平家の侍惡七兵衞景清と（出世景清）

〔何某〕不定稱代名詞を自稱に用ゐたのである。自分。このあたりの文は謠曲景清に據つたのである。

***なにはやき**　東の難波燒が坂町通ひ（生玉）

〔難波燒〕嘉平次が難波の陶滋器商であり、そして難波の高津では難波燒を產するから、かく言うたのである。攝陽奇觀卷之六に、「難波燒＝大阪高津邊にて延寶の頃より難波燒物を初て燒に、器物は無量の類ひ多し、茶碗水指水こぼし花生草香爐藥鍋土釜、其外歐窰の小道具等數品あり、土色は鼠淺黃、藥黑きと青色と薄き綠付の繪あり、花生は牡丹葡萄等色色作り物を用ゆ、陶工のいふ、京都黑谷山の土を用ひて難波に於て燒と ぞ」。魂膽色遊懷男、妾は船に振枕の條に、「其前には爐をきつて、難波燒の土鑵子かけ」。生玉心中のこの文に東の難波といへるは、大和橋に陶器店を出してゐたからかくいうた。

なのりそ　いつ青海苔もかだのりと、身のさがらめをなのりそや（出世景清）

〔奈乃利曾〕「なんりそ」とも云ひ、神馬蘭即ちホンダワラと稱する海藻である。東雅に、「舊說になりそといふは、貪する時にはりはりと鳴るがむつかしければ、なんりそと制する意なり」と見えてゐる。ここの文は名乘に奈乃利曾をいひかけたのである。

縄三寸に縛り上ぐ　（女殺）

捕縄を首輪にして胴體に懸け、兩手を背後に廻して縛上げ、手頸と首縄との間を三寸に締括るをいふ。雪女五枚羽子板に、「三寸縄に括り上げ」、とあるもこの事である。

なはどら　主君の面の汚れ穢れ、洗うても濯いでもなはどら掛けても落ちぬが、眼にはかからぬか（唐船噺）

繩で作つたはし。藁繩をたばねて結び、物を摩り洗ふもの。この語現今も石川縣能美郡安宅地方で用ひられ、「たはし」を「あらひどら」といひ、繩で作つたものを「なはどら」ともいふ。

なべずみ 「つらになべずみ」を見よ。

なべとりくげ 鍋取公家の子は産めど、後腹病まずの片破れ船（松風）

〔鍋取公家〕武官の公家。「鍋取」とは、武官の被る冠の緌（そのほを見よ）が恰も鍋で作つた鍋取の形に似たればいふ。

＊なほし （松風）

〔直衣〕ただの服の義であつて、天皇攝家大臣貴人の平常の服である。其製束帶の袍に似、烏帽子指貫で事濟むものとしてある。桃華蘂葉に「童體の時は白浮礒物直衣、文小葵、裏濃紫也、元服の後は白志志良綾、文波線綾丸、裏平絹、染色躾二年齡、若年之時は紫、次薄色、次淺黃（有二淺深一）、老者用二志良良白綾或平絹一、裏はいづれも平絹也、夏穀、文三重襷、色又隨二年齡一、薄色、淺黃、老者用二張平絹一、或着二用無紋薄物一、烏帽子直衣大納言以上參院之時著之、但可レ蒙二敕免一、於レ私者依二便宜一用之無二子細一、淺位之人、著二烏帽子直衣一事、大井川逍遙之時、藏人頭著二烏帽子直衣一、其外無二例一」とある。直衣は勅許なくては、天皇の御前にこれを著して出られなかつた。

なま お島は酒に醉ひくづれ、ひよろりひよろりとなまになり（二枚繪）

〔生〕生醉の略。生醉機嫌。

＊なまいだばうず あれ一丁目からなまいだ坊主がてんがう念佛申して來る（天網島）

歌念佛坊主をいふ。「うたねんぶつ」を見よ。「なまいだは」南無阿彌陀佛の訛略である。上田秋成撰、呵刈葭、後篇に、「南無阿彌陀佛を俗にはただナンマミダ佛と唱へ、又かけ念佛と早く唱るときはナマイダと唱ふ」。心中天網島のこの文にあるやうに、歌念佛坊主が念佛交りの淨瑠璃の眞似をして歩く者もあつた。

なまづいか 鰻・瓢箪・鯰凧（永朔日）

〔鯰凧〕鯰の形をした紙鳶。元祿寶永頃流行した紙鳶には、ここに云へるがやうに奇形な紙鳶が多かつた。

〔かいづまな〕

（寶永七年刊古書所載）

＊生爪（なまつめ） 私が夫婦になると生爪放して入れたるんで見よ（堀川波鼓） 伏見撞木町 文、これが嘘か讀

桝屋の高尾に又したたか遣うて、心中に生爪を放してくれた（籌門松）

往時遊女の輩が情交深い男に心中立のしるしに己が指の生爪を放して、これをその男に遣つたのである。生爪を放すにはまづ指を酢に浸し、朋輩女郎を頼んで小刀で掩放してもらつたものである。生爪に限らず、或は髮を切り、または指を切落すこともあつた。

なまづをづくり 妹を奥へ押遣り戸を密と指いたるだんびら物、鯰尾作り引拔いて逆手に提げ（持統天皇）

〔鯰尾作〕菖蒲作の刀をいひ、その形鯰の尾に似てゐるよりの名である。本朝軍器考、卷八に、「刀の形制も亦多し、鎬作、菖蒲作、鵜頸など云ふあり、菖蒲作をば又鯰尾とも云ふにや」。武家名目抄・刀劍部・十七に、「按、鯰尾とは其帽子の鯰の尾に似たるが故の名也、後代菖蒲作といふもの是なりといへり（考軍器）」、さもあるべし。

なまりちらす 徒士若黨も刀の威光、銀拵へも胡散なる、なまり散らして歸りしが（冥途飛脚）

銀拵へも胡散なる鉛に、國訛を訛散らすをいひかけたのである。

なみがへし 樂は平調波返し、心意も澄みて覺えける（大職冠）

〔波返〕雅樂青海波の曲にある太鼓の打方の祕曲。青海波の曲はもと平調であつたのを、承和の時勅によつて盤涉調に還された。謠曲・梅枝に「沖も靜かに青海の、青海波の波返し、かへすや袖の折を得て」。

波に山王祭七所（なん） 南蠻ころの大小・對の金鍔、毛彫は波に山王祭七所（反魂香）

刀劍の金具七所、即ち目貫・折金（帶留）・栗形・縁・裏瓦・笄に、波に日吉神輿渡御の模樣を細かく毛筋のやうに彫り描へたものをいひ、意匠をこらした毛彫の刀劍である。日吉神社を山王社と稱するは、慴最澄が唐の天台山國清寺に山王祠あるに準據して、比叡山に延暦寺を創建し、古くからあつた日吉神と共に山王と名付けたより起る。祭神は上中下各七座ある。日吉祭禮は四月中の申日にして、大津の浦に神輿渡御の式がある。巢林子が七所といへるは、刀劍／金具七所のことで、萬金産業袋卷之二に圖解がしてある。

なみのたて 陸には波の楯（加增曾我）

〔波の楯〕波立てるやうに楯を多く並べたるをいふ。「海山一同に震動して云云」を見よ。

なむしよぶつぶんしん 南無諸佛分身と書いた六字を、六角の投子は櫻木（丹波興作）

元祿の世、六角の投子に南無諸佛分身を一字づつ割當てて書き、それを振つて地獄道・畜生道などを經巡り、極樂淨土に到るを以て上りとした。丹波興作のここにいへるは東海道五十三次の道中雙六なれど、投子はなほ淨土雙六のものを用ゐた。還魂紙料上卷を見よ。

＊なめ さてさてなめ者この所を知らぬか、坊門の宰相樣の御下屋敷（女楠）

さてもなめたりなめたり、この夕霧に足もたすば・こりやちと慮外さうな（夕霧）いやいやなめすぎた置かんせ、あれ町の御内儀樣も見てござる（生玉）

無（なし）、即ち無きさまの義。輕、蔑、無禮の意。

＊なや 毎晩ちよこちよこ行く所は市の側の納屋の下（天網島）

〔納屋〕物置小屋。元祿貞享頃大阪の遊納屋遊は夜陰に立君がさまよひて淫を賣る所であつた。「はまなや」を見よ。

なやはうた 役者物眞似・納屋はうた、二階座敷の三味線にひかれて立寄る客もあり（天網島）

〔納屋端唄〕納屋にて遊女または遊客などの謠ふ端唄をいふ。當時傾城屋にては納屋をも離座敷の如くしつらひて遊興所に用ゐた。されば表座敷の差支ある場合、又は氣輕に遊ばうとする遊客は、納屋座敷に馴染の遊女を揚げて遊興したのである。西澤與志撰・伊達髮五人男（寶永四年刊）三之卷に、「近い頃立並びし南堀江の一景、高木や櫨の黃昏、納屋のともし火行く水に躍き、障子に映るよねの風、高島田に大振袖、調子ゆたかにかんばりの聲張上げ、爰はうしねのはまさきむらよ云云」、とあるは即ち納屋にて遊女が端唄を謠ふ情景を叙したのである。

＊なゆたごふ 那由他劫が其間阿鼻の苦患は受くるとも（碁盤太平記）

百億の寶鐸、那由他の羅網、八萬恒沙の瓔珞華鬘（酒呑童子）

〔那由他〕梵語 Nayuta. 大數の名目であつて、百萬とも一億とも云ひ、極めて大數をいふ。「劫」はその條を見よ。大無量壽經・上卷に、「設我得ゝ佛、光明有二能限量一、下至レ不レ照二百千億那由他諸佛國者一、不レ取二正覺一」。

なよし 生物に取りては大鯛・小鯛になよし・すすき（天路）

〔名吉〕鰹の小なるものの稱。和名抄に、「鰹、讀奈與之」。

***奈良團扇** ありし昔に奈良團扇、風かがろと駕籠舁が（卯月調色）

（隣摩歌）

奈良より産出する團扇。雍州府志（貞享三年刊）卷七に、「自二南都一來者以レ紙貼レ竹、其體製至輕、有レ便レ生風、多春日社禰宜製レ之、是稱二奈良團扇一」。後はむかし物語に、「我十歳ばかりまでは、さらさ團扇や奈良團扇、本造團扇ならうちはとて賣りしなり、……奈良團扇といふは是はふちも白き紙にて繪は板行、彩色は蘇枋と雌黃なり、たまたま吹繪も有、……奈良うちはといふは役者をかきてせりふなど書きたるあり」。

***ならく** 念を殘すが迷となり、たとひ奈落へ沈むとも（丹波與作）

〔奈落〕梵語 Naraka. 地獄の意。

ならざ 奈良座の諺の口拍子（大繼冠）

〔奈良座〕大和國奈良の謡の家元、金春・金剛・喜多の三座。又その流。今、金春・金剛を下掛と稱ふ、また喜多流は、喜多七大夫といふ者金剛の弟子であつたが、秀吉の氣に入つて家を興し、ここの流下掛に加はる。

***ならざうり** 雪踏片足に奈良草履（女腹切）

總じて奈良の名物、まづ奈良油煙・奈良團扇・奈良草履（大繼冠）

〔奈良草履〕奈良にて製出した細繰の草履である。醜久一世物（傾城太太神樂卷五所載）、「貞享二年刊」下卷、水は水で果つる身の條に、「とろめんのくつたび、細繰の奈良草履、横ひねりの歩き振云云」。

〔りうざらな〕

***ならざらし** 身を賣りて大阪の埒は明きたれど、又傾城とならざりし、縱横沙汰を聞き觸れて（淀鯉）

〔奈良晒〕奈良名産の晒した麻布。和漢三才圖會・卷二十七、絹布類、曝布の條に「曝布出二於和州奈良一布之上品也」。國花萬葉記、大和國中名物の條に「奈良曝」。西鶴諸國噂・胸算用卷一、伊勢海老は春の紅葉の條に、「奈良晒は毎年盆過きて買ひ置き」。「ならそ」を見よ。巣林子のここの文は、成らざりしを奈良晒にいひかけ、とやかくの取沙汰の意に、奈良晒の縱横の縁から、縱横沙汰といふのである。

ならしだけ 今の小町屋惣七は、博多小女郎がならし竹、何時も心に懸けて置く（博多）

〔馴竹〕横にわたして衣服などを懸ける竿。衣架。物類稱呼卷四、器用部に「衣架＝かけざほ（俗稱）、筑紫にてならしと云」。ここの文意は、昔の小野小町は開寺小町に老衰の恥かしい姿の哀を留め、今の小町屋惣七の哀れな末路は、博多小女郎がならしたをならし竹にいひかけ、ならし竹は衣服などを懸ける縁で、心に懸けて置くといひつづけたのである。

***ならそ** 何と奈良苧のうき身ぞや（丹波與作）

奈良苧うんだる子の親が困果晒に奈良晒（大繼冠）

〔奈良苧〕奈良は麻苧の製産地である。この地から製出したものを奈良苧といひ、奈良苧を布に織つて晒したものを奈良晒といふ。雍州府志（貞享三年刊）卷七、土産門下・服器部に、「南都之所レ織特擇レ苧織得、後湯加レ灰煑レ之、數沸而後木白掲レ之、其後洗二淨清水一、曝二沙場或原上一、如二此數遍故其色至白、是謂二奈良曝布一」。「何と奈良苧」は、「何とならん」に「奈良苧」をいひかけたのである。「奈良苧うむ」は「まを」（眞苧）を見よ。

***ならちや** 新米の奈良茶して申請けんと打笑ひ（今川了俊）

豆腐・奈良茶と茶を賣るも、宇治の川水落ち添ひて（鉾樫三）

されば古歌にも奈良ちやかや、この手盛にて二よそひ（大繼冠）

身はならはしよ奈良茶粥（博多）

奈良屋が奈良茶、下地は奈良の春日野の、雪の白ゞきすつくりと、鹿子斑に黑豆散し、さつとかけたる宇治の出花のお茶（大繼冠）

〔奈良茶〕奈良茶粥の略。茶飯に大豆・小豆、または粟などを振掛けたものをいふ。もと奈良の東大寺・興福寺などにて炊ぎはじめたによつてこの稱があるといふ。「奈良ちやかや」とあるは「奈良坂や」をもじつたのである。「古歌にも奈良茶かや」を見よ。

ならゆえん 人の心に花咲けば、實もなら油煙手合せに、朽ちぬ寶や握り墨（用明天皇）

〔奈良油煙〕奈良より製出する墨を奈良油煙墨と稱し、古來良品として其名知られてゐる。雍州府志（貞享三年刊）卷七、土産門下・服器部に、「中世南都興福寺二諦坊取下持佛堂燈火烟之薫二滯屋宇一者、和二牛膠一而製レ之、是南都油煙墨之始也」。

***なりきん** まづ飛車先の歩を突きませう、ヤ此成金して遣らうでの（醫門松）

〔成金〕將碁上の通語で、敵陣地に侵入した歩・香車・桂馬・銀將は總て金將の資格となるが故に成金といふ。序云、ここの文より察すれば巣林子は將棊の名人ではなくて棊人の部類であるらしい）。

なりんじこと なりんじ事をば說かず、遂げんじ事をば諫めず（娘）

「成りにし事」の「に」が鼻にかかつて「成りんじ事」となつたのである。既に成つた事。「遂げにしこと」を「遂げんじこと」といひ、「往にしこと」を「往んじこと」といふも皆この類である。「なりんじ事をば云云」を見よ。

***なれ** やよや待て、なれよ冥土の鳥ならば死出の山路に關据ゑて（會稽山）

汝。萬葉集・卷十一の歌に、「いつしかなれがぬしまちがたき」の「なれ」に汝と書き、古今集・雜歌上部の歌に、「宇治の橋守なれをしぞあはれとは思ふ」、とありて古くから用ゐられた語である。

なんかくだいし 太子樣に添うたものさうな、殊に前生は唐土南岳大師と申す大知識の御再誕（聖德太子）

〔南岳大師〕天台の第二祖、南岳（五岳中の衡岳）に住した慧思禪師をいふ。聖德太子の前身は南岳大師であるとの說は、扶桑略記第三、敏達天皇六年の條に、「私云、今案、聖德太子是南岳大師後身也、驗眞和尚云、聞南岳思禪師遷化之後、託二生倭國王子一、興二隆佛法一濟二度衆生一、倭國王子者聖德太子也」と見えてゐる。

なんきやう 難經・脾胃論（咎景節）

〔難經〕漢方の醫書である。王翰林集註、宋王維一撰のものに我が慶安五年の刊本がある。

＊なんきん 南京のはち匁から九匁を、（博多） 氷突出す染つけの南京すずし錫の皿（會稽山）

「南京のはち」とあるは、南京の鉢（嬉遊笑覽云「南京燒は慶長年中より渡る」）に八匁をいひかけた。「かたじゆけ云々」の條をも對照せよ。ここの文意は、支那南京燒の鉢は貴重な物なれども、八匁九匁の捨賣にするのである。「南京生絹」は生絹に涼しをきかせ、錫と頭韻の文飾に用ゐたまでである。

なんぜい 惟茂弓矢の法を知らぬとは尤も和主に似合たる難勢（絶籌）

〔難勢〕むづかしい言掛り。法華文句記・十に、「廣ニ難勢一、不ニ越ニ先規一」、とありて難問する氣勢の義である。

＊なんだ 爰は蛭子の御社、御誕生の折柄に難陀が口よりあつ湯を出し、跋陀が口より溫湯を出し産湯をひかせ（烏帽子折） 難陀跋陀の二龍王雲を凌ぎて天降り、口より溫湯熱湯を吐き産湯を灑ぎ奉ろ（鞠迦）

〔難陀〕梵語 Nanda. 龍王の名である。法華經・序品に、「有ニ八龍王一、難陀龍王、跋難陀龍王云云」、とありて科註に、「難陀此云ニ歡喜一、跋此云ニ善、卽兄弟二龍、常懸ニ塵竭提一、雨澤以レ時、國無ニ飢年一」。

＊なんてふ 義朝陣頭に進んで、何條弟の八郎め（鎌田） 牛若はつと肝にしみ、なんでふ母を引渡させ罪科に遭はせ置くべきか（孕常盤）

「なにてふ」（何云）の詰つた語で、「何といふ」の義である。多く當字に何條と書けども、何條は「なんでう」で假名遣が違つてゐる。伊勢物語に、「世の憂き事どよをになるてふ」、とある「てふ」はここにいふ「でふ」と同じものである。

＊なんてやる 人呼びまはつて何でやる（丹波與作）

「なんである」の訛。何用であるか。

なんてん 〔南殿〕「なでん」とよむのが故實である。「なでん」を見よ。

南天と大蒜（なんてんにんにく） 軒を打越す細紐に結下げし水仙一本、行當りびつくりし、コリヤ何ぢや厄病の呪か、但し洛中物騷の盜賊のまじなひか、病除の爲ならば南天と大蒜を吊はず、アア開えた（閑八州）

戶上に南天と大蒜を吊すは病除の呪禁である。夜光璧・中之卷に、「南天と蒜を戶上に懸くるは本草綱目に、大蒜は鬼を殺し邪氣を去るとあればなり、南天燭は筋を強くし氣力を益し、身を輕くし年を長くし老を却くるとありて、其外功能多く德すぐれたるものなれば、蒜にならべてかくると見えたり」。ここの文意は、「病除の爲ならば南天と大蒜を懸けるべきに、水仙一本吊すとは扨何のわけやら」といふのである。

なんどり 「つい・なんどり」を見よ。

なんばうけぬき 一度に群り來る所を引寄せ引寄せ首すつほり、蹈付けてはほんと拔き、南方毛拔釘貫まさりの二人が手さき（閑八州）

〔南方毛拔〕名古屋より製出する鎹（けぬき）の稱。諸葛亮の後出師表に、「思ニ惟北征一、宜ニ先入ニ南、故五月渡ニ瀘、深入ニ不毛一」とある中の「南」と「不毛」とをきかせていつた洒落詞の其名稱となつたのである。本朝世事談綺・器用部に、「尾州名護屋の產也、南方の名は近衞殿のつけさせられしといふ、孔明が出師の表に、深く不毛に入り今南方已定、甲兵足れりの心也と云云」。吉田藤助撰・古渡記に、「鎹（けぬき）南方名物なり、南方尾州產、足利義教公富士御覽之時熱田圓福寺に止宿ありしに、古渡の鍛冶鎹を奉りしが、なんぼうよきけぬきなりと仰せられしより、家號とせしよし」。

難波の祖師（なんばそし） 難波の祖師の名號、探幽の觀世音（三世相）

難波御堂の祖師教如上人のことである。「難波の祖師教如上人」は教如上人自筆の名號（卽ち南無阿彌陀佛）をいふのである。難波御堂は大阪東區北久太郎町四丁目にありて、裏御堂又は南御堂とも稱す、慶長年間大谷本願寺派の教祖教如上人本寺を創立し、本尊は安阿彌作の阿彌陀佛であつて、現に同派屈指の名刹である。教如上人自筆の名號は信徒の尊崇厚く、隨喜の涙を流す物品である。

なんばやき 「なにはやき」を見よ。

なんばん 紅絹裏に源氏雲の裾ぐくみ、南蠻ごころの大小・對の金鍔（反魂香） 本國長崎に黃陳といふ南蠻外科（藤壓歌） この膏藥では手負は癒らず、南蠻流に人の油、うぬめは油がありさうな（松風）

〔南蠻〕往時南洋諸島を經て來朝した西洋人、殊に葡萄牙人・西班牙人を稱した。

「南蠻ごころ」は南蠻（ごろふくれん）吳羅服連の略、吳羅服連は繭語（Grof grein. の訛、駱駝の毛織物であつたが、後には羊毛又は綿麻を交へて織り、平織も綾織もある。南蠻流來の吳羅服連の文に似た鮫鞘をいふ。

「南蠻外科」とは西洋外科醫術をいふ。「南蠻流」とは南蠻外科醫の治療法をいふ。黑川道祐撰・雍州府志・貞享三年刊）六に、「凡本朝外科有ニ兩流一、一本朝所ニ傳來一也、一傳ニ西洋耶蘇治療之法一、治ニ纏瘍并金瘡一、是謂ニ南蠻流一、今以ニ斯傳一爲ニ良」。

＊なんぼ ただゆかしいは父樣母樣、なんぼ思ひあきらめてもあひたうござる（大經師） よしない手形なんぼう後悔仕る（歌念佛）

「なにほど」（何程）の略轉。延べて「なんぼう」ともいふ。どんなに。いかに。謠曲・隅田川に、「なんぼう世には情なき者の候ぞ」。同・鉢の木に、「なんぼう無念のことざふぞ」。

南面の位（なんめんくらゐ） 君を南面の位に卽け（井筒）

天子の位をいふ。易繫辭下傳に、「聖人南面而聽ニ天下一、嚮ニ明而治」。

に

にあがり よその哀れを身の上に、思ひしらべの絲よりも、心は二あがり三下り、撥もしどろに彈きなせり（女夫池）

〔二上り〕三味線の彈き方、本調子よりも二の絲の調子を高くするもの。

＊にえる 念者坊の袖辨樣は蹈殺すとてにえさつしやる（萬年草） 勝次郎は追放で八幡はにえる（淀鯉）

〔煮〕沸立つ義。腹立の焰をもやす。騷き立て